

第1章 序 章

この報告書は、奈良ファミリー建設に伴う西隆寺跡の発掘調査および都市計画道路建設に伴う西隆寺跡の発掘調査の成果をまとめたものである。

奈良ファミリー建設に伴う調査は、1989年度の第209次調査・第210次調査、1990年度の第212次調査・第219次調査の4回にわたり、発掘面積は3990㎡である。

都市計画道路建設に伴う調査は、1990年度の第221次調査、1991年度の第223-4次調査・第227次調査・第228次調査・第223-21次調査の5回にわたり、発掘面積は2081㎡である。

1 西隆寺の発掘調査

西隆寺跡は、奈良市西大寺東町の一角にあり、近畿日本鉄道西大寺駅の北東にあたる。西大寺駅は、京都・大阪・奈良・橿原各方面への乗り換え駅として、周辺での宅地開発の進展に伴って、近畿日本鉄道有数のターミナル駅として成長してきた。駅周辺、特に西隆寺跡の位置する駅北東一角は、ショッピングセンターを核にした商業地区として開発が著しい。現在では、地上5階程度のRC建築が林立する景観となっている。開発に伴う発掘調査は随時行われ、奈良時代末期創立の尼寺である西隆寺、奈良時代の平城京、古墳時代の建物跡の様子が明らかになりつつある。

西隆寺の発掘調査は1970年代前半と1980年代末から90年代初頭の2時期に区分できる。

A 1970年代前半の調査

1960年代に日本住宅公団が計画した平城ニュータウン建設構想を契機として、1970年代前半に西大寺駅周辺は急速な開発ラッシュとなり、駅北口から東へ伸びる市道沿いには、ショッピングセンターや銀行などが建設され、水田は急速に減少することとなった。

この開発に伴い、1971年3月から5月にかけて7件の開発に伴う発掘届が提出され、仮設建物の建築を除く6件について発掘調査を行った。その結果、西隆寺の金堂・塔・東門・南面を画する築地を確認するとともに、西隆寺造営以前の井戸や掘立柱建物を検出し、西隆寺造営に関する木簡の出土があった。その調査成果は西隆寺調査委員会『西隆寺発掘調査報告』（1976年3月）として刊行されている。

B 1980年代末から90年代初頭の調査

(1) ショッピングセンター改築に伴う調査

1970年代前半の調査の後建設されたショッピングセンターが古くなり手狭となったため、改築計画が起こった。今回はショッピングセンターの大幅な増床及び立体駐車場を伴う工事のため、前回には調査対象とならなかった部分にも開発行為が及ぶこととなった。そのため奈良県教育委員会の依頼のもと、奈良国立文化財研究所が発掘調査を行った。発掘調査は旧ショッピン

グセンターが解体される以前に、開発者の所有地で増床予定部分・立体駐車場予定部分を行い、その後開発者の土地買収に伴って発掘調査を随時行い、1989年9月から1991年3月にかけて合計4回で総面積3990㎡の調査を行った。

(2) 都市計画道路建設に伴う調査

奈良市は都市計画道路整備事業の促進を図っているが、その一環として西大寺一条線の計画が1960年代に決定されていた。

西大寺一条線は西大寺駅北口から東北方向へ約400m延びる幅員20~28mの全く新たな道路であり、このうち北3分の2部分が1992年度までの事業として決定された。事業主体は奈良市で、国庫補助を受けて行われた。当該区を南から便宜的にⅠ~Ⅴ区に分け、発掘調査が可能な状況になった部分について、随時発掘を行った。

発掘調査は奈良市の依頼のもとに奈良国立文化財研究所が行い、1991年1月から1992年2月にかけて、221次(Ⅰ区)・223-4次(Ⅴ区)・227次(Ⅳ区)・228次(Ⅲ区)・223-21次(Ⅱ区)の順に合計5回で総面積2081㎡の調査を行った。



Fig. 1 西隆寺周辺の平城京条坊と現状図

2 報告書の作成

今回報告するのは奈良ファミリー建設に伴う西隆寺跡の調査4回分と、都市計画道路建設に伴う西隆寺跡の調査5回分である。

以下発掘責任者と発掘担当者・発掘関係者を列記する。

次数	発掘年度	所長	平城宮跡発掘調査部長	発掘担当者
第209次	1989	鈴木嘉吉	町田 章	島田 敏男 金子 裕之 巽 淳一郎 寺崎 保広
第210次	1989	鈴木嘉吉	町田 章	巽 淳一郎 金子 裕之 村上 隆 寺崎 保広 佐川 正敏
第212次	1990	鈴木嘉吉	町田 章	杉山 洋 高瀬 要一 山崎 信二 浅川 滋男
第219次	1990	鈴木嘉吉	町田 章	玉田 芳英 上野 邦一 森本 晋 森 公章
第221次	1990	鈴木嘉吉	町田 章	松本 修自 金子 裕之 巽 淳一郎 寺崎 保広 佐川 正敏 小野 健吉 中村 慎一 松本 修自
第223-4次	1991	鈴木嘉吉	町田 章	島田 敏男 寺崎 保広 佐川 正敏 毛利光俊彦 館野 和己 本中 真
第227次	1991	鈴木嘉吉	町田 章	玉田 芳英 上野 邦一 森本 晋 森 公章
第228次	1991	鈴木嘉吉	町田 章	森本 晋 上野 邦一 玉田 芳英 森 公章
第223-21次	1991	鈴木嘉吉	町田 章	松本 修自 金子 裕之 巽 淳一郎 寺崎 保広 佐川 正敏 小野 健吉 浅川 滋男 高瀬 要一 山崎 信二 杉山 洋

報告書の作成は1991年度から開始し、遺構関係の整理については遺構調査室・計測修景調査室あたり、遺物については考古第一調査室・考古第二調査室・考古第三調査室が分担し、執筆分担はつぎのとおりである。

第I章 山崎 信二

第II章 館野 和己

第III章 1 小野 健吉 2 杉山 洋 3 山崎 信二

第IV章 松本 修自

第V章 1 小沢 毅 2 A・B・D 杉山 洋 2 C・E～H 玉田 芳英

3.4 中村 慎一 5 杉山 洋

第VI章 1 光谷 拓実 2 古環境研究所

3 中野 益男・福島 道広・中野 寛子・明瀬 雅子・長田 正宏

第VII章 1 小野 健吉 2.3.4 松本 修自 5 杉山 洋 6 小沢 毅 7 山崎 信二

英文要旨 佐々木 憲一

絵図類の掲載については西大寺・東京大学文学部の許可を受け、東京大学史料編纂所、同大学文学部佐藤信助教授の協力を得た。なお、布の鑑定については布目順郎氏に依頼し、その成果は結語に記した。

遺構・遺物の写真撮影は佃幹雄・牛島茂が行なったが、プラント・オパールは古環境研究所による。

編集は町田章の指導のもとに山崎信二が担当した。

図面浄書はそれぞれ執筆者が分担し、上田素土子・信夫利子・杉本陽子・松岡緑・吉田佐恵子・吉村純子・吉本妙子の助力があった。

Tab. 1 各次調査の期間・面積等

調査次数	調査地区	地区名	面積(m ²)	調査期間	調査担当者	原因	報告
209	西隆寺旧境内	6BSR	1,800	1989 9.28～11.29	島田敏男	奈良ファミリー 建設	1989年度概報 奈文研年報1990
210	西隆寺旧境内	6BSR 6AGA	560	1989 11.20～12.12	巽淳一郎	奈良ファミリー 建設	1989年度概報 奈文研年報1990
212	西隆寺旧境内	6BSR	600	1990 5.7～6.19	杉山 洋	奈良ファミリー 建設	1990年度概報 奈文研年報1991
219	西隆寺旧境内	6BSR	1,030	1990 11.7～11.22 1991 1.22～3.29	玉田芳英 松本修自	奈良ファミリー 建設	1990年度概報 奈文研年報1991
221	西隆寺旧境内	6BSR	585	1991 1.22～3.14	小野健吉	奈良市都市 計画道路	1990年度概報 奈文研年報1991
223-4	右京北辺二坊	6AGR	56	1991 6.13～6.14	島田敏男	奈良市都市 計画道路	
227	西隆寺旧境内	6BSR 6AGR	500	1991 7.2～7.31	玉田芳英	奈良市都市 計画道路	1991年度概報 奈文研年報1992
228	西隆寺旧境内	6BSR	400 300	1991 8.5～10.3 10.3～11.7	森本 晋 松本修自	奈良市都市 計画道路	1991年度概報 奈文研年報1992
223-21	西隆寺旧境内	6BSR	236	1992 1.6～2.6	浅川滋男	奈良市都市 計画道路	1991年度概報 奈文研年報1992

なお、平城宮跡発掘調査部では平城宮跡の発掘調査に次数を付けてきたが、昭和48年の平城京調査以降、平城京でも平城宮調査と同じ続き番号の次数を付け始めた。ただ、南都諸大寺の発掘調査では、薬師寺・大安寺・西大寺など次数を付けてはいなかった。

これら諸大寺の調査も含めて、平城宮・京調査と同じ続き番号の次数を付け始めたのは、1989年の薬師寺東面回廊の調査（第207次）以降のことである。『西隆寺発掘調査報告』（1976年）では、1971年から73年までの調査を第1次～6次と呼んでおり、本報告にかかわる第209次から第223-21次調査を、それぞれ西隆寺第7次～15次調査と呼ぶことも可能である。しかし、2つの次数を連記することは混乱を招く恐れがあり、本報告では第210次から第223-21次の呼称を用いている。